

てんてん

祈り ② 仮安置



新しい納骨堂に身元不明の遺骨を安置する市職員
=宮城県気仙沼市大槌山



東日本大震災から8回目のお盆を前にした8月3日、宮城県気仙沼市の市斎場に隣接する施設に、黒ネクタイを締め、白手袋をした市職員が並んだ。一室に保管する身元不明の遺骨を、市の納骨堂に移すためだ。

火葬許可証には、発見場所が「西側ガレキ集積場内」「沖の田海岸」「河口付近」、死亡時期が「平成23年3月11日午後頃推定」と記されたものもある。そんな震災犠牲者とみられる遺骨は24柱。うち全身分は1柱で、残りは体の一部だけだ。

身元不明の遺骨は発見場所の市町村が保管する。震災の場合、仮安置先のほとんどが行政の施設か地元の寺院だった。気仙沼市の施設には一時、110柱が並んだ。

3日後の6日、岩手県釜石市の墓地公園で納骨式が営まれた。弱い雨が降る中、市が新築した納骨堂に、市職員らが10人の身元不明遺骨の入る箱を納めた。

読経と焼香が終わった後、仙寿院住職の芝崎恵応(62)があんどの表情から急に真顔に戻り、やや大きな声で言った。「渡したかった」。いま納めた遺骨を遺族の手に、と。

あの日、高台にある寺には市民が津波から逃げてきた。避難者が寝泊まりする本堂の廊下は、次第に遺骨箱で埋まっていく。身元不明だけでも一時、115柱にのぼった。

生前の信教はわからない。気仙沼市のような行政施設なら宗教色はない。釜石では地元の寺院が「仏教会」を立ち上げた。せめて宗派を超えて対応するためだ。会長だった芝崎の寺が代表して身元不明遺骨も預かった。そのまま7年余り、寺で弔い続けた。

釜石の納骨堂は「震災物故者」を納める。「身元不明者」とは限らなかった。

いつまでも「身元不明」ではかわいそうだ。身元がわかってでも遺族の事情で寺に残る遺骨もある。みんな、いつかはこの納骨堂に入れるように。芝崎らの配慮だった。

震災から7年半が過ぎた。いまだ身元が判明しない遺骨の多くが、遺族と再会できないまま、行政の納骨堂に移っていく。

釜石の北にある岩手県大槌町は、身元不明の遺骨が被災地で最多の70柱を数える。津波後の大火災で焼け、DNA型鑑定すら難しいとされる。すべては昨年、町が建てた納骨堂に入った。それまで預かっていたのは町内の三つの寺だった。(佐々木達也、山浦正敬)

渡したかった、遺族の手に。市の納骨堂に納められた身元不明の遺骨を。

てんてんてん

祈り ⑦ お地藏さん



被災地から戻った地藏に手を合わせる野口法蔵住職＝長野県松本市

信州・松本にある臨済宗・禅院のまだ新しいお堂はヒノキの香りが漂う。寺の名はチベット仏教の最高指導者ダライ・ラマ14世から贈られた。小さな境内には、石の地藏菩薩たちが祭られている。

赤い帽子をかぶり、首に「傷跡」のある1体は岩手県大槌町から戻ってきた。東日本大震災で被災した町の48カ所の仮設住宅に「心の支援」でお地藏さんが置かれてきた。送り主が、住職の野口法蔵(59)だった。

きっかけは、震災から5カ月後の2011年8月、大槌でボランティア活動をする国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の職員、千田悦子(55)からの電話だった。

「自宅にあるお地藏さまを大槌に送ってもえませんか」

千田は09年暮れ、大学の先輩である国連職員の紹介で、野口の主宰する座禅断食会に参加した。後日に自宅も訪ねた縁だった。

千田はアフリカの難民キャンプの運営調整などをする緊急人道支援のプロ。帰国して手術療養中に震災が起き、個人の資格でNPO法人の活動に加わった。

避難所から仮設住宅に移る避難生活を支えながら気になった。被災者が自室に閉じこもり、孤独を深めていた。「心が安らぐようなものを中心に人が集まれる場が必要だ」

町は津波とその後の火災で壊滅的な被害を受けた。犠牲は人口の1割に及ぶ。リアス海岸なので平地が少なく、仮設住宅は48カ所に分散して建てられた。入居先を抽選で決めたため、隣近所のつながりも失われた。

京都市出身の千田は楽しかった地藏盆を思い出した。石か岩、道祖神かお地藏さんはどうか。地藏なら宗教色は薄い。この提案に、所属する地元NPOも賛同してくれた。庭に地藏を祭る野口を思いだして連絡した。

届いた2体を仮設住宅などに置くと、花や数珠が添えられた。「復興地藏」の木札や毛糸の赤い前掛けも。千田は再び依頼する。

「全ての仮設住宅に置きたい」

野口が石材店に頼んでつくった48体が大槌に運びこまれたのは11年10月だった。計50体。足元には写経を納めた竹筒を埋めた。野口は仮設住宅を回り、お経を唱えた。

お地藏さんに手を合わせる2人の女の子がいた。身近な死に初めて接して何かを考えているように、野口には見えた。(山浦正敬)

「心が安らぎ、集まれる場を」。すべての仮設住宅に50体が置かれた。

てんてんこ

祈り ⑧ 心の支援



仮設住宅に置かれた地蔵の前
で経を唱える野口法蔵さん＝
2011年10月、岩手県大槌町

岩手県大槌町の48カ所の仮設住宅に置かれた地蔵はそれぞれ、毛糸で手編みした赤い帽子やずきん、前掛けなどが着せられていた。木のほこらもつくられた。

近くには地元でつくられた木製ベンチも置かれ、自室に閉じこもりがちだった被災者たちが、地蔵のそばに集まり出した。

地蔵を地元のNPOに送った長野県松本市の僧侶、野口法蔵(59)は2011年3月の東日本大震災後、すぐに被災地支援を始めた。長年交流する新潟大出身の医師らと医薬品を福島県いわき市に届けた。事故を起こした東京電力福島第一原発から約20キロしか離れておらず、事故への不安が募った。

宮城県亘理町などには病院食や簡易ベッドなどを運んだ。岩手県宮古市には炊き出し用のコメを大量に送った。ただ、支援物資を送りながら、どこか違うと考えていた。

「本当の救済は物資ではない」。物の支援は精神的なフォローがあって初めて役立つ。だが、何をしたらいいのか。

インドのチベット仏教の寺院で出家した野口は、アジアを中心に国際的な支援も続けてきた。カンボジアの地雷撤去のほか、寒波に襲われたモンゴルの支援、アフリカのエイズ対策、チベットの寺建設などだ。

震災の10年余り前、北朝鮮から逃げてきた脱北者に北朝鮮の食糧危機の実情を聞くため、中国東北部に入った。食糧支援に向けた調査だった。国境の川を歩いて渡ってくる脱北者に接触した。

飢えた子供もいた。すぐに大量のご飯を与えたが、体が受けつけない。下痢が続いて衰弱死した。一方、支援する現地の教会は違った。神に祈らせ、食事を少し与える。それを繰り返しながら体力を回復させた。物と心の支援を連動させる力を感じた。

野口はその経験から、物資の支援より前に必要な心の支援をしようと大槌町の仮設住宅に地蔵を置いた。被災者から尋ねられた。「人は死んだらどうなるのですか」「死んだ人はどこに行くのですか」。野口は断言した。「四十九日で人は必ず生まれ変わる。新しい人生のために祈った方がいい」

死者は死後の世界にいると信じ、四十九日、一周忌、三回忌……と続ける法要と異なる。生まれ変わるのだから、悲しむのは四十九日まで。野口はそう説く。(山浦正敬)

本当の救済は物資ではない。だが、何をしたらいいのか。

てんてん

祈り ⑨ 心の復興



仮設住宅から戻ってきた地藏。マフラーやレインコートを着せてもらった地藏もある＝4日、岩手県大槌町

「四十九日で生まれ変わる」とは、チベット仏教の教えだった。ヒマラヤの奥地などで修行した長野県松本市の僧侶、野口法蔵(59)は、その死生観を岩手県大槌町の仮設住宅の人たちに伝えた。

野口は元報道カメラマンだ。1982年にバングラデシュの大洪水の取材に向かった。現地はコレラの感染が拡大していた。

だが、支援をしていたカトリックのシスターたちは残った。ノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサが隣のインドにつくったホスピス「死を待つ人の家」から来ていた。

1人が息絶え絶えの赤ちゃんに息を吹きこんでいた。自らの命の危険を顧みない宗教者の姿を見た衝撃から、野口はカメラを手放し、ヒマラヤの秘境にあるチベット仏教の僧院へ向かい、僧侶になった。その地では、死者からの力を橋渡しするのが地藏だった。

2011年の東日本大震災で人口の1割が犠牲になった大槌では、身内や友人を亡くした人も多い。津波に襲われた海沿いの集落から離れ、山間部の仮設住宅に入った被災者は、身内の墓参りもままならない。

そこに、野口が贈った地藏が仮設住宅に置かれた。「肉親を亡くして心細かったが、毎日手を合わせるものができてうれしい」。そう被災者から感謝された。

チベット仏教の「四十九日」を伝えるのも地藏を置くのも、心を立て直す一助になりたいたの思いからだ。同時に思う。「悲しみをどう取り除けるか、それは誰も示せない」

チベットで修行した野口は、自宅横に建てたお堂などで、地面に体を投げ出して拜む「五体投地」を続ける。そばには、大槌のすべての犠牲者の名前を記した過去帳、仮設住宅で続けている写経教室で被災者が書いた写経を置く。親を亡くした子供の文字は当初は乱れていたが、最近は丁寧になってきた。

被災者の心の復興も徐々に進む。地藏へのお願い事も「孫の大学入試の合格祈願」などと変わってきた。住宅再建も進み、仮設住宅も解体されていく。野口が贈った地藏は役目を終え、地藏を置いて回った地元NPOに返り始めた。これを防潮堤の内側斜面に造られる「鎮魂の森」に並べる構想もある。

野口は秋の彼岸に合わせて22日、家族と大槌を再訪する。交流の続く仮設住宅の人たちから誘われ、今回で10回目となる。(山浦正敬)

バングラデシュで見た宗教者に衝撃を受け、チベット仏教の僧院へ向かった。

てんでんこ

祈り ⑩ 托鉢の地

石雲禅寺の本堂で座る小原宗鑑さん＝盛岡市渋民



「ナナハン」と呼ばれる大型バイクが盛岡市から東に延びる国道106号を疾走した。連続カーブで山を越える。ライダーの背に登山用リュック。テントや食料も積む。

バイクは峠のトンネルを抜けて岩手県宮古市の「区界高原」に入った。ライダーが頭上の電光表示板に目をやった。

「只今の気温 マイナス7℃」

東日本大震災から約3週間後の2011年4月2日。標高700m以上の高原は本州でも有数の寒冷地。季節は春でも零下だった。

凍結してスリップがこわい。そのうえ胸の内にもっと大きな不安を抱えていた。

ライダーは小原宗鑑(35)。盛岡市渋民にある石雲禅寺の副住職だ。当時28歳。

寺には修養道場「パパラギの里」の宿坊がある。3歳から母に連れられて座禅に通った。出家して25歳から宿坊に住み込む。

津波で被災した東北地方の太平洋沿岸は、修行の托鉢で繰り返し訪れた地だ。施しを受けた人たちの顔が浮かぶ。無事だろうか。

「行かなければ」。師匠で当時の住職に相談すると、「行ってみなさい。行ってから何ができるか探せば良い」と背中を押された。

その言葉に仏教のある説話が重なった。托鉢の地が飢饉に襲われ、その地を回るのをためらう僧侶にお釈迦様が促す。「こういう時こそ行くのだ」

深刻なガソリン不足も落ち着き始めている。托鉢で車中泊やテント泊は慣れている。道路が通じているかどうかもわからないまま、友人から譲り受けたナナハンにまたがり、朝、寺を出た。

沿岸に着いたのは夕暮れ時だ。停電で信号も点灯していない街は暗く、惨状はわからない。市街から北に少し離れた景勝地の浄土ヶ浜に向かい、林の中にテントを張った。

あすは被災した宮古の市街に入る。だが、出発前から抱える不安は消えない。

托鉢でお経を唱えたら、助けを求める行方不明者の声をかき消してしまわないか。僧侶の姿を見たら、行方不明者を捜す人は思うだろうか。

翌朝、法衣に着替え、被災した市街に徒歩で向かった。道の両脇にそびえるようながれきの山が続く。魚の腐ったような、鼻をつくにおいが街を覆っていた。(山浦正敬)

Ⅱ次は25日に掲載します。

「こういう時こそ行くのだ」。副住職は「ナナハン」にまたがった。

てんてんてん

祈り ⑪ 法衣

わらじのひもを結び直す小原宗鑑さん。2011年4月4日、岩手県山田町、中田徹撮影



盛岡市の石雲禪寺副住職、小原宗鑑(35)は2011年3月11日、東日本大震災が起きた時、境内にある木造の宿坊にいた。

激しい揺れで外に出ると、4階建ての宿坊はV字のような形で、縦に弾み、横に揺れていた。停電もした。小原らは外にテントを張り、はんごう炊飯で過ごした。

寺のある内陸部に津波被害はないが、あえて沿岸の避難所と同じような生活を続けた。ご飯とみそ汁だけの食事と数日おきの入浴……。 「共に歩む」との思いからだ。 「被災から何を学ぶかが大切」と考えた。

当時、20代の若者だった。 「今、自分が行かなければ」と思い込む。言葉では説明できないが、 「何かに反応した」と振り返る。

沿岸の寺では犠牲者の供養もできない状況、とニュースが伝えた。僧侶としても「何か役に立ちたい」。自分が行けば「拝んで欲しい」と頼まれるかも、とも考えた。そして4月、被災した三陸沿岸に向かった。

寺から100m以上の道を行き、岩手県宮古市で持参したテントで夜明けを待った。法衣に着替えて、被災地に向かおうとした時だった。年配の女性が声をかけてきた。

「何しているの」

盛岡から来た僧侶で、托鉢で世話になった沿岸を合掌して回るつもりだ、と答えると、女性は「法衣なしでやればいいのに」と返してきた。普通の服でボランティアをするか、法衣を着て僧侶として回るのか。

「女性の姿を借りて、天から『お前は街を歩く覚悟はあるか』と試されたのかも」

そのまま法衣で歩き始めた。だが、惨状に圧倒され、お経どころか言葉すら出ない。無言で合掌して回るだけだった。

その夜、南隣の岩手県山田町に向かう途中にある神社で野宿した。携帯電話で、石雲禪寺の住職に連絡した。何もできなかった初日を報告した。住職が導いてくれた。

「普段の托鉢と同じように歩いたらいい。がれきに謝りなさい」

津波で犠牲になったのは人間だけではない。動物や昆虫、植物など多くの生き物も死んだ。そのすべてのために、がれきに向かって拝みなさいとの話だった。

すべての命を拝む、と考えると、「被災地に僧侶がいたらどう思われるか」という心配や不安が気にならなくなった。(山浦正敏)

動物や昆虫、植物、多くの生き物も死んだ。「すべての命を拝む」

てんてん

祈り 12 拝む



港で海に向かって経を唱える小原宗鑑さん＝2011年4月4日、岩手県山田町、中田徹撮影

一枚の報道写真がある。

青い法衣を着た僧が季節外れの雪が舞う中、がれきの中で合掌している。寒さからか、手と顔がピンク色に染まる――。

東日本大震災で津波に加えて大規模火災に遭った岩手県山田町。2011年4月4日、がれきに向かって拝む石雲禅寺副住職、小原宗鑑(35)を朝日新聞カメラマンが撮り、海外にも発信した。その姿は、被災に圧倒されて無言で歩いた前日とは一変して力強い。

前夜に住職から電話で言われたように、右手に鈴を持って托鉢と同じように歩いた。ただ、左手には鉢はない。合掌するように胸の前で立てながら「舍利礼文」を唱えた。

釈迦の遺骨を礼拝する経文で、被災を免れた住民の住む家はあえて行かず、ひたすらがれきだけを拝み続けた。

すべての命のため、と考えると、見逃していた被災も見えてきた。

飼い主と一緒に逃げられなかったのか、首輪をつけた犬が死んでいた。死後の腐敗でふくらんだ牛の乳を、カラスがつつく……。一方、がれきを拝む小原に向け、片付けの手を止めて合掌している人たちもいた。

それから2週間かけ、隣の岩手県宮古市から宮城県石巻市まで三陸沿岸の被災地を歩いた。途中から石雲禅寺の尼僧らも合流した。頼まれて遺体を拝むこともあった。

体育館に安置された遺体は腕だけや、こげた足だけなどで、どれもビニール袋に包まれていた。すべての遺体を拜んで外に出ると、子供らがボールを蹴って歓声をあげていた。壁一枚で隔たれた生と死の落差を考えた。火葬が追いつかずに土葬された遺体も拝んだ。被災地で学んだのは「何も出来ないこと」だった。ボランティアや社会活動も大切な役割だが、僧侶としては、何も意味の無いことをあえてやるのも修行だと信じる。

石雲禅寺の玄関に腕のとれた観音様が飾られている。石巻市のがれきの中から見つかった木像で、窮乏した被災の教訓「足るを知る」から「知足観音」と名付けた。足元には別の報道写真パネルがある。

山田町の漁港で海に向かって合掌する小原の後ろ姿だ。すべての命に謝る、と決めた翌朝で、伸びた背筋から心境がうかがえる。

「私の原点で、おごり高ぶらないように、これを見て戒めになっています」(山浦正敬)

被災地を歩いて学んだのは「何も出来ないこと」。

てんでんこ

商店街 13 イオン



津波で壊れた釜石市の中心商店街。被災したアーケードはすべて撤去された

東日本大震災の津波で被災した岩手県釜石市の市長、野田武則(65)は問い直した。

「イオンじゃないといけないのか」

視線の先の女子高校生が即答した。

「そう、だめなんです」

被災から半年過ぎた2011年9月、復興に向けて高校生の声も聞きたいと、市が県立釜石高校で意見交換会を開いた。再建する地元で欲しいものが話題になった。

釜石は製鉄のまちだ。国内の近代製鉄の発祥の地で、高炉の跡は世界遺産。戦後復興や高度成長に伴う製鉄所の活況で、県内第2の都市に成長した。港と工場を結ぶ県道沿いには百貨店や四つの商店街が連なった。

しかし、高炉廃止を伴う合理化などで活気を失う。人口はピークの1963年の9万2千人から震災時には半以下に。市中心街は活気を失い、高校生ら若者の憧れの商業施設は、盛岡市にあるイオンモールだった。

それは意見交換会の4日後だった。

市役所2階の市長室にイオンタウン(千葉市)の大門淳(65)が訪ねてきた。現会長で当時の社長だ。野田は前月、釜石にホームセクターを構え、支援を続ける関連会社の社長(当時)に、「イオン誘致が最大の支援」と取り次ぎを頼んでいた。女子高校生の声で意を強くした野田は面会で切り出した。

「釜石への出店を検討して欲しい」

市街が壊滅状態の被災地で、大門は進出の姿が想像できなかった。建設する高速道のインター付近の山を削って造成するのか。「どんな形になるのか」と逆に問い返した。

全国の地方で中心街の空洞化が進む。釜石も同じで、シャッター通りに戻しても未来がない。イオンが再建の牽引役に、という。

副市長ら市幹部たちもそろっていた。大門は「検討させて下さい」とだけ答え、儀礼として握手して退こうとした。だが、野田は強く握り返してきた両手をいつまでも離そうとしない。大門の「検討」の余地が狭まっていた。そのまま流れができていく。

市は2カ月半後、復興計画をまとめた。イオンとは明記しないものの、「新たな商業拠点空間」による中心街再建案を描いた。

すぐ釜石商工会議所が反応した。(山浦正敬)

市長は強く握ったイオンタウン社長の手を離そうとしなかった。

大型商業施設は良薬か劇薬か。釜石市と宮城県石巻市でそれぞれの模索をみる。

てんてんこ

商店街 ⑭ 商工会議所



夕方になり輝くイオンのネオンサインと再建店向け商業施設(左)=岩手県釜石市

「まちづくりの第一歩」。反対ではなく、推進だった。「前向きな光を求めた」

586

イオンタウン釜石は、津波で被災した岩手県釜石市の中心部に立つ。3階建ての建物などに食料品や衣料、飲食など57の専門店が入り、週末は幅広い年齢層の客でにぎわう。約3万7千平方メートルの敷地は、新日鉄住金からの借地だ。工場と専用桟橋のある港との間に広がる通称「中番庫」で、その工業専用地域が復興特区に認められて出店可能となった。誘致を目指す市が同社と交渉した。

大型店の進出は時に地元商店とあつれきを生む。水面下でイオン誘致の動きが進むなかで、釜石商工会議所も意見した。

市が復興計画で「新たな商業空間づくり」を例示した翌月の2012年1月だった。

「震災復興の兆しとなるもので、釜石まちづくりの第一歩と捉え……」

反対ではなく、推進だった。四つあった中心商店街の集約・再編も求めた。商議所幹部が背景を解説する。

「被害があまりにもひどく、商店主らにすぐに再建する余力はなかった。そんな真っ暗な状況の中、前向きな光を求めた」

良い時代の残像もあった。市街には震災の9年前まで、5階建てビルに入る大手総合スーパーがあった。仙台市から進出した百貨店を継いだ店舗で、買い物客が集まった。

だが、スーパーは親会社の経営破綻で02年に閉店。消費は盛岡市や隣の大槌町など外に向かう。県の調査で地元購買率は震災前、県内13市中で12位の8割弱だった。

そこに津波が追い打ちをかけた。中心商店街も壊滅状態となった。仮設住宅の被災者も盛岡市まで買い出しに出かけた。

「近隣に復興名目で大型店ができれば、ますます消費を市外に持っていかれる」。行政、商議所、商店とも危機感が強く、市街への誘致反対はうねりにならなかった。

出店計画が公表されたのは市長の直訴から5カ月後で、その2年後の14年春に開業した。商圈は大船渡市や宮古市など近隣を含む16万人で、釜石の人口の4倍余り。商店街再建は進まずに更地状態の市街で、夜は「AEON TOWN」のネオンだけが輝いた。

イオンの開業から3年4カ月後、書店3代目の桑畑真一(65)がようやくそばに小さな店を再建した。仮設商店街から移った先は、中心商店街跡にたつ災害公営住宅ビルの1階だった。

(山浦正敬)

てんてんてん

商店街 15 別世界



桑畑書店が催した「ビブリオバトル」=13日、岩手県釜石市

持ち寄った本をそれぞれ紹介する。全員で討論して、最も読みたい本を選ぶ。

岩手県釜石市の桑畑書店が13日に初めて催した知的書評合戦「ビブリオバトル」だ。

東日本大震災で被災した店舗は、港のそばの商店街にあった。自ら建てた鉄骨2階建ての店は4万冊以上の本もろとも流された。

店主の桑畑真一(65)は泥だらけの台帳や記憶を頼りに本の配達を再開した。仮設商店街に入りながら再建を目指した。

イオンタウン釜石のテナント説明会にでかけてみた。顔見知りも多い。書店向けの優遇も示された。だが、開店資金が壁になった。

開業時に市内から入ったテナントは歯科医院とダンス教室だけ。それでも消費者には全国ブランドはまばゆい。ただ、周辺の店まで恩恵が届くかは気になる。「被災で消費の力がなくなっている」と桑畑はいう。

桑畑の再建先はイオンそばの災害公営住宅ビルで、売り場は約70平方メートルと元の店の3分の1。イオンに入る書店と差異化するため、配達に加え、作家のサイン会などを催す。

市街に四つあった商店街の組合のうち残るのはイオンそばだけで、あとは解散した。残った商店街とイオンの間に、市は文化ホールやカフェなど人の集う施設を造った。災害公営住宅も14棟、約400戸を近隣に集めた。

一帯の物販や飲食などの75店を昨秋、岩手県立大の梅津樹奈(22)と田村大智(21)らが回った。市と協働の調査で、書店や美容院などイオンのテナントとの競合店も多い。

8割近くが「商圏の人口減」を、3割近くが「大型店との競合」を課題に挙げた。「イオンに来る人が商店街に来るかと思ったけどそうでもない」などだ。一方で、一時減った客が戻りつつあるとの声も聞かれた。

「考えられない別世界」。イオン誘致の先頭に立った市長の野田武則(65)は、現状をそう表現する。大型店を核に集客の仕掛けはできた。次の鍵は「事業者の努力」という。

イオンの来店者は年々増え、今夏には隣に関連会社の市内2号店となるホームセンターもできた。一方で、大型店が近隣市町も含めて、地元の消費を吸い取ってしまったないか。釜石では百貨店やスーパーが撤退した歴史から、「もしや」の懸念も消えない。

共存かライバルか。震災前から大型店と向き合う宮城県石巻市に舞台を移す。(山浦正敬)

イオンの来店者は年々増え、隣にはホームセンターも。だが、懸念も消えない。